

堀仕上工：漏水を最小限に食い止めるため、路盤改良工法（セメント系添加剤を 30 cm厚で混合）して転圧

堀底レベル：遺構面レベルは標高 9.00～9.20m程度、整備面レベルは一律標高 10.80m（一定勾配）

整備面から遺構面までの深さ：1.6～1.8m程度

給排水設備：地下水ポンプからの給水口 3 箇所、農業用水からの給水口 1 箇所、排水口 5 箇所（整備時 3、整備後 2）、土橋下に横断暗渠。

④土橋と木橋の復元

各曲輪の間に土橋を復元。本丸・二の丸間には、発掘調査の成果に基づき木橋を復元。木橋は、幅 3.6m、長さ 20 mで、木材にはラクヨを使用。



写真 4-3 本丸・二の丸間の土(木)橋

⑤土塁展示施設

建築面積：56.99 m²

構造：鉄筋コンクリート造、半地下式、屋根はアスファルト防水・コンクリート・磁器質タイル

内容：土塁の土層はぎとり断面（高さ 3m×幅 17m=51 m²）の展示



写真 4-4 土塁展示施設の外観

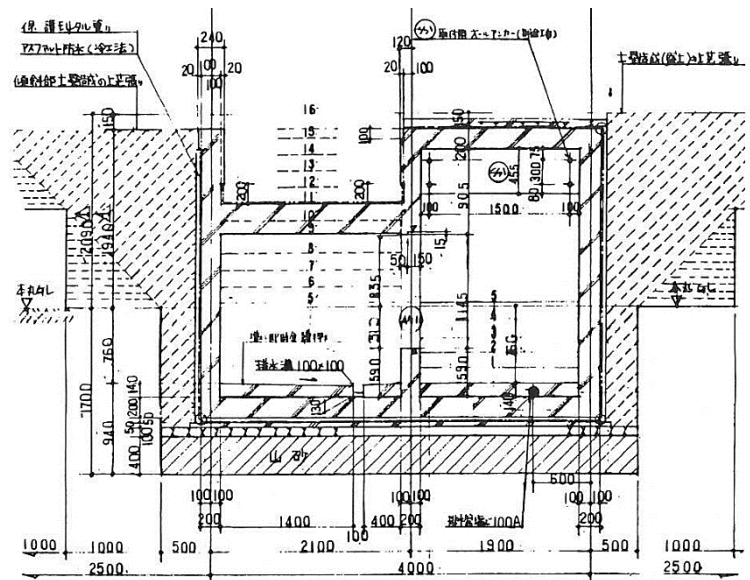


図 4-1 土塁展示施設断面図（当初整備）

⑥野外模型

面積：81 m²（9m×9m）、構造：陶板製（有田焼）

内容：史跡全体模型（1/110）及び関連城郭の位置関係図（1/1,700）等の展示

⑦園路

園路舗装工：山砂と天然土壌安定材を混合した土舗装で、自然な風合いに仕上がるよう施工。

（2）資料館

建築面積：211.56 m²、延床面積 249.45 m²、敷地面積 931.96 m²

構造：鉄筋コンクリート造 2 階建

概要：ガイダンス室、出土品展示室、史跡解説映像設備（上映時間 14 分）など



写真 4-5 安田城跡資料館



写真 4-6 野外模型

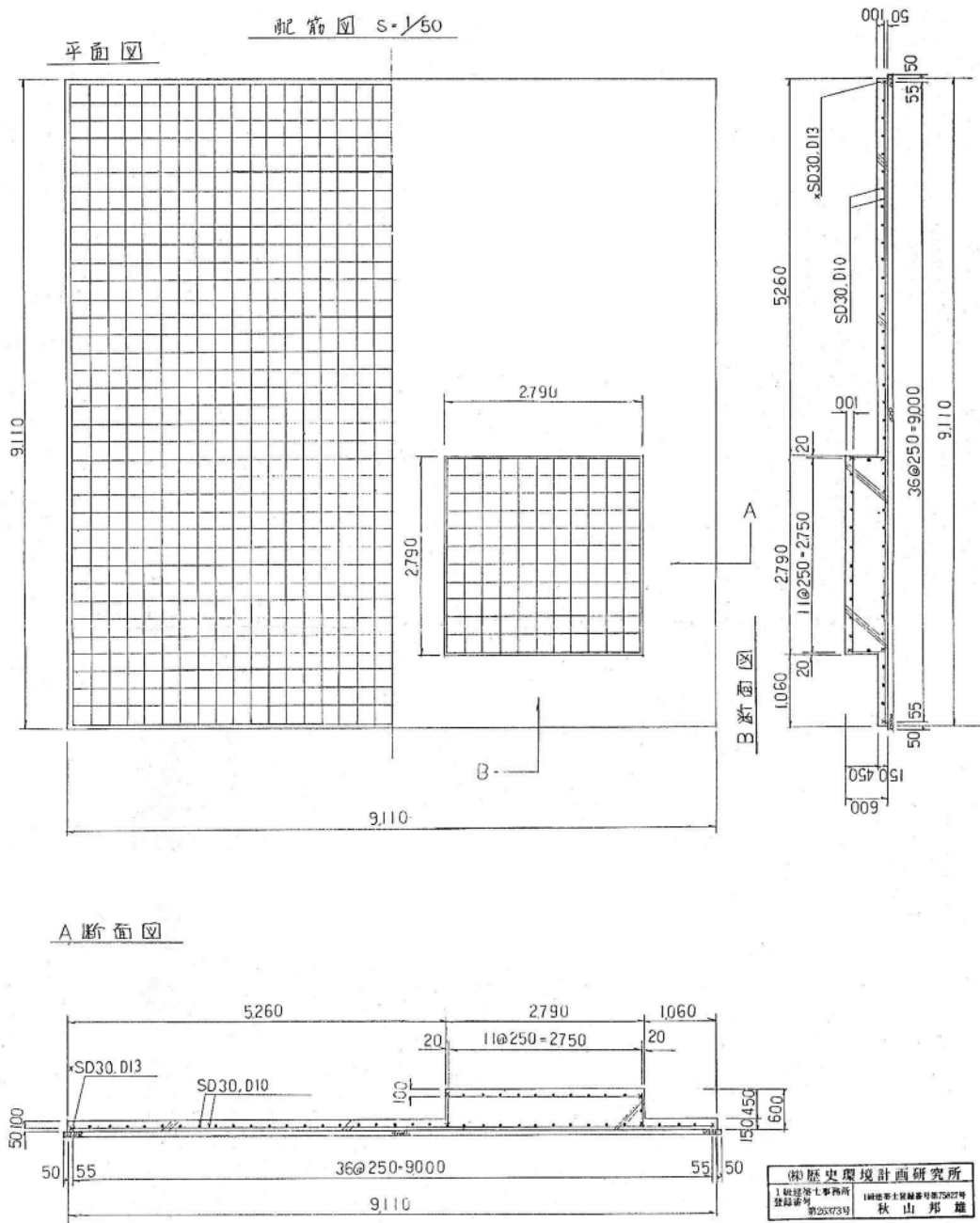


图 4-2 野外模型基礎施工圖 配筋圖 (当初整備)

第2項 保存・整備の現状

史跡指定地は、史跡公園「富山市婦中安田城跡歴史の広場」として常時、無料公開している。また、広場に併設された安田城跡資料館では、出土品や史跡解説映像、企画展示等を無料で観覧できる。施設は、開場後 25 年を経過して全体に深刻な老朽化が認められ、一部は史跡への影響が懸念されるものもある。来場者や周辺住民等に被害を与える危険性がある箇所については順次応急処置を行っているが、抜本的な対策が図られていない。以下、現状を記す。

1. 堀の底泥の堆積

底泥が平均 20 cm 程度の厚さで堆積し、悪臭や景観の悪化に繋がっている。底泥の原因には 2 つあり、水生植物（スイレン・ヨシ・ヒシ・アサザ等）と農業用水に含まれる泥の微粒子があるが、底泥の堆積厚がスイレン・ヨシの密集度と比例するため（図 9-2-1、図 9-4-1）、底泥の多くは過剰繁茂した水生植物に起因すると考えられる。

また、水生植物の根茎が厚い層となり、底泥の露出をさらに助長し、水の流動を阻害している。

堀の水深は 40 cm だが、農業用水から給水しているため、給水が停止する稲刈時期は水深 10 cm まで低下し、底泥が広範囲で露出する。



写真 4-7 底泥の露出状況

(水面がみえる部分はスイレン間引き箇所)

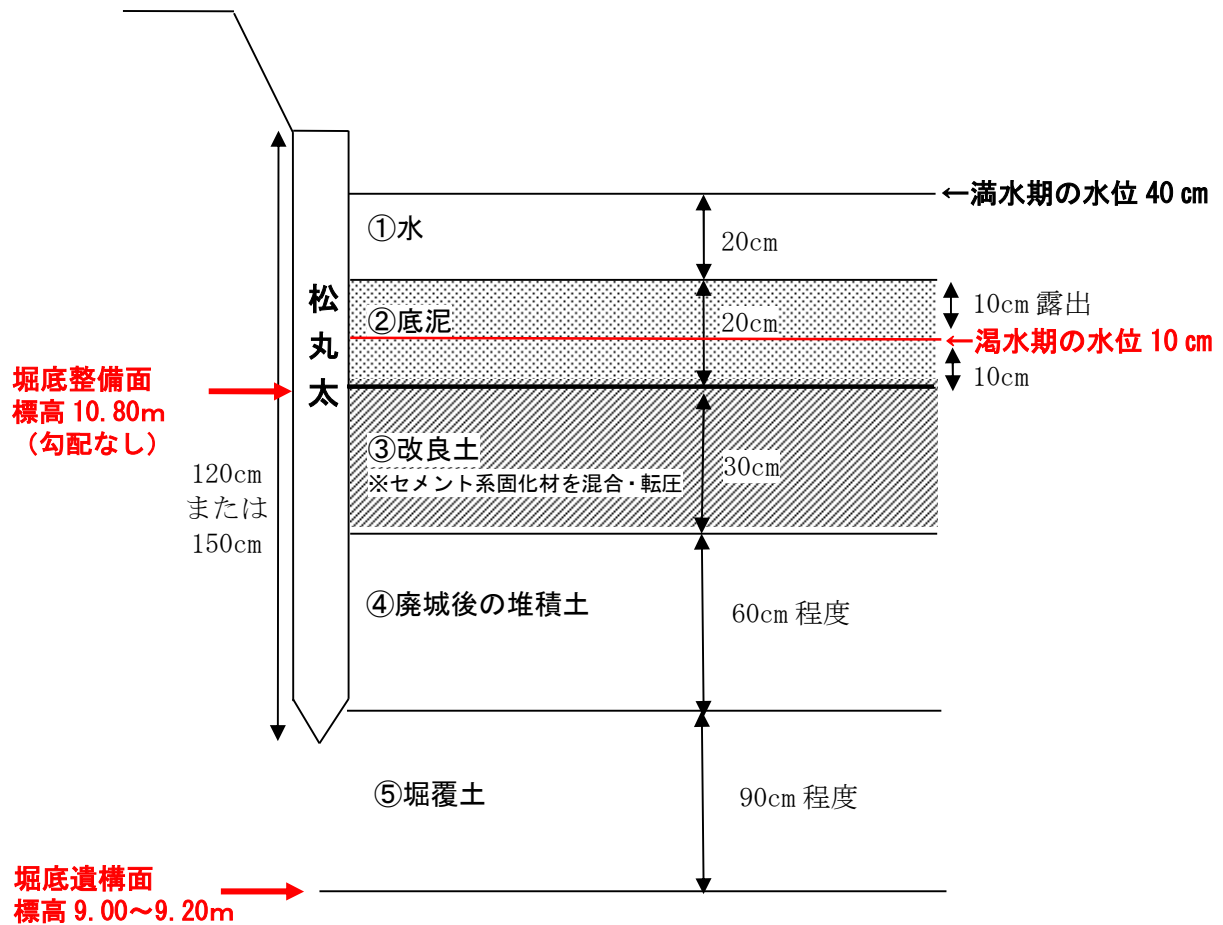


図 4-3 堀底断面の模式図

2. 堀の護岸・堀底の現状

(1) 堀底

平均 30 cm の厚さで地盤改良されている（廃城後の堆積土にセメント系添加剤を混合して転圧）。トレンチ掘削による堀の現況調査では、地盤改良層は当初の厚さが保たれていることが確認された（第9章第1節第1項1(2)②）。



写真 4-8 漏水箇所の応急処置状況

(2) 護岸

地盤改良されておらず、整備後一部には遮水シートが施工されたものの、水が横方向に浸透しやすく、漏水や陥没を引き起こしている。護岸に設置された松杭も空気に触れる部分が劣化しており、護岸が浸食を受けて、広い範囲で土砂の流出が認められる。



写真 4-9 護岸陥没穴応急処置状況

(3) 土橋下の横断暗渠

土橋下には、横断暗渠が 5 本×10 箇所に敷設されている（写真 9-2-8、写真 9-2-9）。暗渠は、直径 30 cm のコンクリート管で、下端は堀底面と同じレベルである。

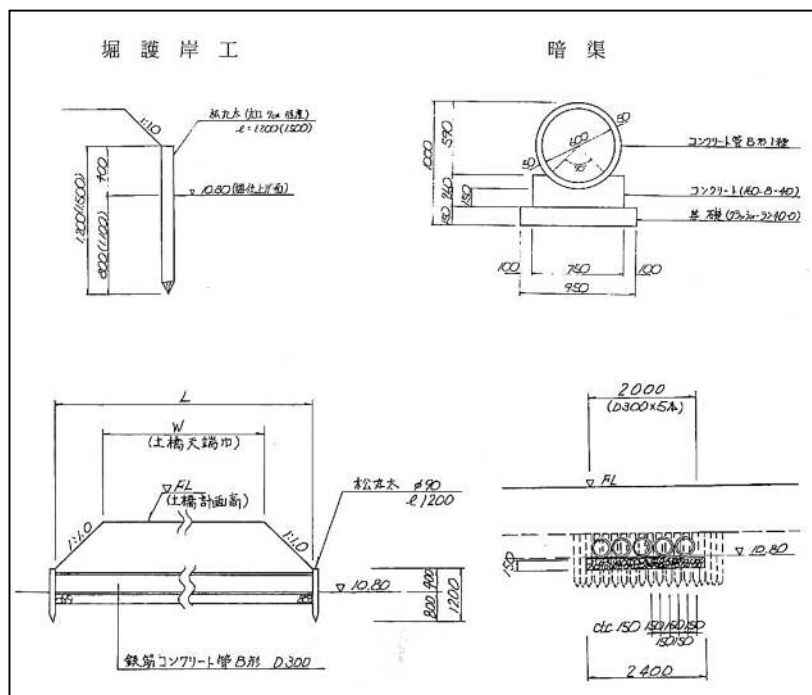


図 4-4 当初整備の設計図（堀護岸工、暗渠）



写真 4-10 護岸の浸食と松杭の腐朽

3. 堀の給水方法の変更とそれに伴う問題点

整備当初、堀への給水は地下水ポンプで地下水を汲み上げていたが、平成10年度、電気代節減のため、史跡南側の農業用水からの給水に変更した。その結果、維持管理費が軽減し、通常時期には多くの水量を確保できるようになった。

しかし、その一方で、稲刈時期は給水が停止するため水深が10cmまで低下し、湯水期には底泥が広範囲で露出するようになった。また農業用水に含まれる泥の微粒子は、水生植物とともに底泥の堆積の一因となっている。

以下、農業用水と地下水ポンプによる給水方法について、現状を踏まえて比較検討を行う。

(1) 農業用水による給水について

《現状》(図4-5～図4-7)

①給水口の位置

1箇所(広場南西端)

②給水時間

稲刈時期(8月末頃～10月中旬頃)以外は、基本的に終日給水されている。

③安田用水の水の使用について

安田用水は辺呂川排水路から水を引いたものである(図4-7)。この用水の水利権は安田地区が保有しており(※用水施設の管理は朝日土地改良区)、堀における農業用水の使用は土地改良法の規制の対象外である。また、安田集落からは平成10年に合意を得ており、水の使用に問題はない。

堀に給水しているのは安田用水末端部の余剰水であり、堀を経由して排水路に排水される。堀への水路の分岐点以降、当該用水を共有する水田は1筆のみであり、堀への給水により、結果的にこの水田への過剰な水の流入が回避されている。

用水からの給水量の調整は、用水に取り付けられた堰板の開閉によるが、水田の水管理への影響から堰板の操作は市が行わず、水利を管理している安田地区に依頼している。

④給水量(冬季の場合)

農業用水からの給水量を把握するため、富山県立大学工学部の奥川光治准教授に給水口付近の用水の流量調査を実施していただいた。調査結果は次のとおりである。

[富山県立大学工学部奥川光治准教授による農業用水の流量調査結果]

調査日	平成30年11月21日
流量	340 L/分(490 t/日)、水深5.5 cm

ただし、流量は季節によって変化し、一般的には田植えの時期から夏季にかけて多くなり、稲刈りの時期に減少あるいは全く流れなくなる。そのため、用水からの給水量を正確に把握するには、年間を通しての流量調査の実施が望ましい。

⑤堀の年間の水位の変化

堀の年間の水位の変化は、次のとおりである。ただし、水田の水管理が気候等に左右されるため、堀の給水の時期ごとの量やタイミングは年によって異なる。

ア. 水位が一定している時期(11月～7月19日頃)



写真4-11 広場の南西端にある農業用水の給水口

- ・水位は 40 cm 前後。
 - ・水田の非灌漑期～普通灌漑期。農業用水から多くの水が給水され、水位が排水口に設置した堰板の天端のレベルを超えると、水がオーバーフローして排水される。
- イ. 水位が低下気味となる時期（7 月 20 日頃～8 月 25 日頃）
- ・水位は 36～40 cm 程度。
 - ・水田に最も水を使う幼穂形成期。水田は 7 月下旬から湛水気味となり、8 月初旬から 20 日間程度は完全に湛水管理が実施される。この間水田への給水が優先され、堀の水位は低下気味となる。（※漏水や蒸発による減少分と同程度かそれ以下の水しか供給されない状況）
- ウ. 水位がかなり低下する時期（8 月 26 日頃～10 月 14 日頃）
- ・水位は最低で 10 cm 程度。
 - ・水田の落水期～収穫期。収穫 5～7 日前までの間断かん水、落水し、稲刈が実施される。この間、用水上流で水の量が調整され、8 月 26 日頃～9 月あたま頃に堀への給水が止まり、その後、堀の水位は低下し続ける。
 - ・給水停止後、降水がない場合、水位は 1 日あたり 1 cm 程度低下する（蒸発量 5 mm、漏水量 5 mm）。
- エ. 水位が回復する時期（10 月 15 日頃～10 月末）
- ・10 月 15 日頃から農業用水の給水が再開される。
 - ・水位は 1 日 1.8 cm 程度上昇し、10 月末に通常の水位（40 cm）に戻る。

《農業用水による給水のメリット・デメリット》

①メリット

ア. 藻類（アオコなど）の発生が少なくなる ※水田の水管理の影響を受けない時期

- ・地下水ポンプと比較すると給水量が多く確保できることから、藻類の原因となる水の滞留や水温の上昇を小さくすることができる。また農業用水は、藻類の原因となる窒素濃度が地下水よりも低い。

イ. 電気料が不要である

- ・地下水ポンプを使用しないため、電気料が不要である。

ウ. 堀は、安田用水末端部に位置し、用水の余剰水のはけ口ともなっているため、堀への給水により関係水田への過剰な水の流入が回避されている。

- ・関係水田の地権者から、水田側の用水配管（※）が劣化しており、堀に給水されずに水が 1ヶ所に集中すると水圧で配管がもたなくなり、破損や漏水による浸食範囲の拡大を危惧する意見がある。

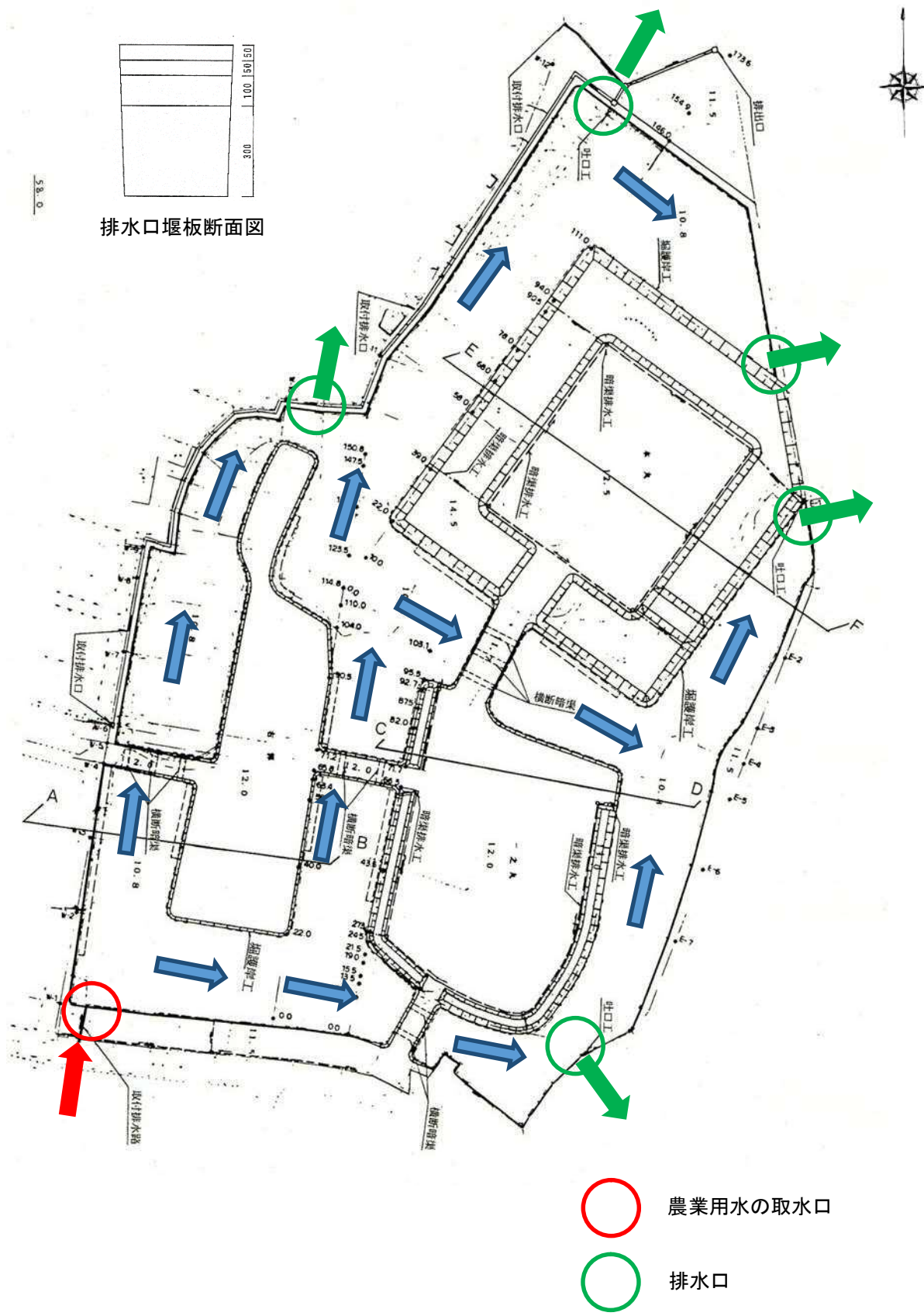
※広場から市道を挟んで南側の宅地敷地に埋設された配管

②デメリット

ア. 農業用水に含まれる泥を原因とした底泥が厚く堆積した場合、浚渫の必要が出てくる

イ. 水田の水管理の影響を受けて、給水が減少・停止する期間がある

- ・水位の低下により、周囲を水堀で防御した往時の安田城の姿を理解しづらくなるほか、水質や水生植物の維持管理等にも悪影響が出る。



排水口堰板断面図

- 農業用水の取水口
- 排水口

図 4-5 堀における水の流動経路 (平成 30 年度現在)

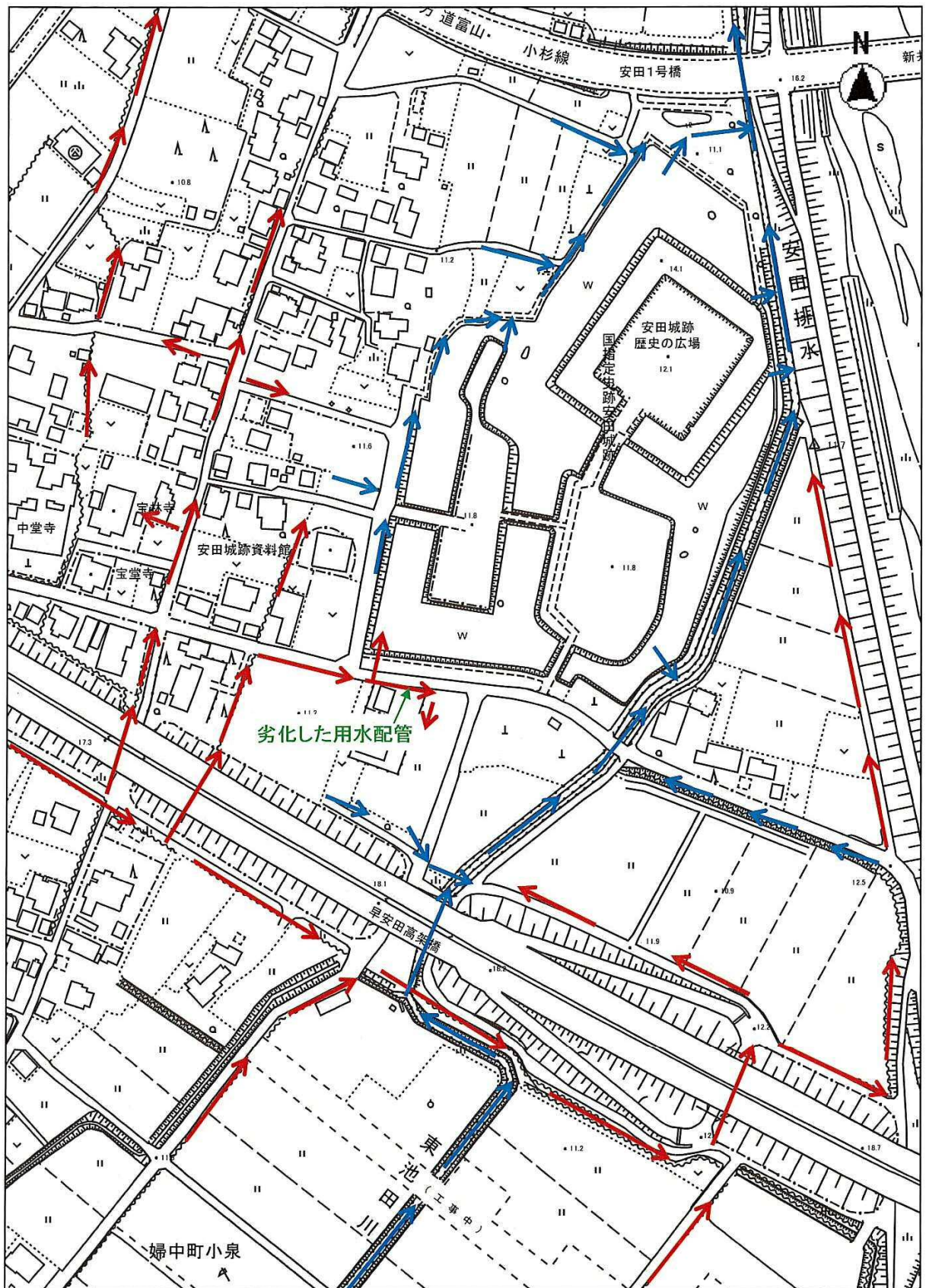


図 4-6 安田城跡歴史の広場周辺のおもな用排水路



图 4-7 朝日地区用排水路平面图 (朝日土地改良区図面に加筆)

(2) 地下水ポンプによる給水について

《現状》

①ポンプの設置状況

ポンプは広場南東に位置し、堀への給水口が3箇所（①地下水ポンプ横、②二の丸北西、③右郭南東）に設置してある。

②ポンプの使用状況

農業用水による給水方法への切替え後（平成10年度）、年1回の地元行事（安田城跡月見の宴）でのみ使用している。

③ポンプの性能

- ・吐出量は300ℓ/min（※カタログ数値）。給水口3箇所の各々の吐出量は、止水弁を全開にした場合、①地下水ポンプ横約120ℓ/min、②二の丸北西約100ℓ/min、③右郭南東約80ℓ/min（※平成30年10月12日、富山県立大学奥川光治先生に概算水量を簡易計測していただいたもの）。
- ・出力（定格電流値） 7.5kW



写真4-12 地下水ポンプ



写真4-13 地下水ポンプによる堀への給水状況（二の丸給水口）

《地下水ポンプに切り替えた場合》

①稼働時間

ポンプ稼働中に不具合が生じた場合の対応等を考慮すると、稼働可能時間は、開館日の8:45～16:45（7時間）のみとなる。

②給水量

- ・1日あたりのポンプ吐出量は126t（水位にすると約7mm程度）となる。
- ・期間中の給水量の試算方法は、次のとおり。
 - ・ $300\ell/\text{min}$ （1分間のポンプ吐出量） $\times 60$ 分 $\times 7$ 時間（1日の稼働時間） $= 126,000\ell = 126\text{t}$ （1日のポンプ吐出量）
 - ・ $126,000\ell \div 17,074\text{m}^2$ （堀の面積） $= 7.3\text{mm}$ （水位が上昇する量）
- ・ポンプによる給水量は、農業用水（冬季）による給水量（490t/日）と比べると、25.7%程度に留まる。

《地下水ポンプに全面的に切り替えた場合のメリット・デメリット》

①メリット

- ア. 農業用水からの泥の流入がなくなるため、浚渫をほとんどしなくてよくなる。
- イ. 水田の水管理の影響を受けないため、年間を通してある程度の水位を保つことができ、周囲を水堀で防御した往時の安田城のイメージを保てる。

②デメリット

- ア. 藻類（アオコなど）の発生率が高まる
 - ・農業用水と比べると給水量がかなり少なく（農業用水の25.7%）、藻類の原因となる水の滞留や水温の上昇が避けられない。
 - ・安田城跡の地下水の窒素濃度は、水が滞留した時に藻類が出やすくなる濃度の目安より

もかなり高く、農業用水と比較しても高い。つまり、水が滞留すると藻類が発生しやすい水質である（表 4-1）。

- ・地下水ポンプで給水していた当初整備時も、給水開始後 1 年程度でアオコが大量発生している（写真 4-14）。



写真 4-14 広場造成 1 年後の堀のアオコ発生状況

イ. 電気料金がかかる

[1 時間あたりの電気料金]

- ・ $7.5 \text{ kWh (1 時間あたりの消費電力量)} \times 23.02 \text{ 円 / kWh (1 kWh あたりの電気料金単価)}$
 $= 172.65 \text{ 円 ((a) 1 時間あたりの電力量料金)}$
- ・ $7.5 \text{ kWh (消費電力量)} \times 2.9 \text{ 円 (再生可能エネルギー発電促進賦課金単価)}$
 $= 21.75 \text{ 円 ((b) 1 時間あたりの再生可能エネルギー発電促進賦課金)}$
- ・ $172.65 \text{ 円 (a)} + 21.75 \text{ 円 (b)} = 194.4 \text{ 円 ((c) 1 時間あたりの電気料金)}$

[ポンプの電気料金の試算]

- ・ $7 \text{ 時間 / 日} \times 307 \text{ 日 (年間の開館日数)} = 2,149 \text{ 時間 ((d) 年間の稼働時間)}$
- ・ $194.4 \text{ 円 (c)} \times 2,149 \text{ 時間 (d)} = 417,765 \text{ 円 (年間の電気料金)}$

※ただし、電気料金は消費税（8%）を含み、基本料金と燃料費調整額は含まない金額。

（3）農業用水及び地下水ポンプの水質調査

①富山県立大学奥川光治准教授による水質分析

富山県立大学奥川光治准教授に、堀への給水源となる農業用水と地下水ポンプの水の水質分析をお願いした。以下、分析結果及び奥川准教授からご教示いただいた内容についてまとめる。

藻類、アオコの発生は、栄養源の窒素やリンが問題になるが、安田城跡の地下水は、全窒素が 0.81 mg/L と、一般的な表流水・河川と比べると高濃度である。その殆どは硝酸態窒素 (0.69 mg/L)

であり、肥料由来のものが多と思われる。一方、リンについては、地下水では一般的に濃度が低く、安田城跡の地下水も庄川 (0.01 mg/L) と比



写真 4-15 地下水ポンプの水の採水状況

べて少し高い程度（0.03mg/L）である。水が滞留した時に藻類が出やすい濃度の目安は、全窒素が 0.2～0.3 mg/L 程度、リンが 0.02 mg/L 程度であるが、安田城跡の地下水はそれと比べて窒素濃度がかなり高い状況であり、水が滞留するとプランクトンが発生しやすいことが分かる。

窒素濃度は、給水口近くの農業用水（0.66 mg/L）や井田川の本流である神通川（0.51 mg/L）は、庄川（0.28 mg/L）と比べて高いが、安田城跡の地下水（0.81mg/L）よりは低濃度である。

濁度は、安田城跡の地下水が 0.5 度、給水口近くの農業用水が 0.8 度であり、採水した季節においては、いずれも濁りのないレベルであることが分かった。ただし、農業用水については、代掻き期・田植え期・大雨等の際には濁度が高くなることが予測される。

水質分析結果

富山県立大学工学部環境・社会基盤工学科
環境工学講座 水質環境工学研究室

検体	検水種別	地下水		
	採水箇所	安田城跡地下水		
	採水者	水質環境工学研究室		
	採水年月日	2018年10月12日	採水時刻	14:10
	天候	曇	気温(°C)	19.2
	分析期日	2018年10月～11月		

検体	検水種別	農業用水		
	採水箇所	安田城跡農業用水		
	採水者	水質環境工学研究室		
	採水年月日	2018年11月21日	採水時刻	15:05
	天候	晴	気温(°C)	16.3
	分析期日	2018年11月～12月		

分析項目	単位	地下水	農業用水	(参考)神通川 大沢野大橋 *1	(参考)庄川 太田橋*2
水温	°C	15.4	13.2	13.5	13.3
pH	—	6.8	7.8	7.1	7.7
電気伝導率	mS/m	27.7	15.2	6.8	7.2
濁度	度	0.5	0.8	—	1.6
溶性ケイ酸	mg/L	31.2	14.7	10	8.68
有機物(TOC)	mg/L	0.5	1.3	—	0.7
全窒素	mg/L	0.81	0.66	0.51	0.28
有機態窒素	mg/L	0.12	0.11	0.16	0.01
無機態窒素	mg/L	0.69	0.55	0.34	0.27
アンモニア態窒素	mg/L	0.00	0.01	0.01	0.01
硝酸態窒素	mg/L	0.69	0.54	0.33	0.26
全リン	mg/L	0.03	0.01	0.022	0.01
フッ化物イオン	mg/L	0.04	0.01	—	0.10
塩化物イオン	mg/L	9.36	11.7	2.4	2.87
硫酸イオン	mg/L	9.05	10.2	5.9	10.2
炭酸水素イオン	mg/L	139	47.8	26	24.4
ナトリウムイオン	mg/L	9.31	8.72	2.7	2.82
カリウムイオン	mg/L	1.37	0.92	0.8	0.47
マグネシウムイオン	mg/L	4.29	1.76	1.1	2.08
カルシウムイオン	mg/L	31.9	12.7	6.9	17.1
硬度	mgCaCO ₃ /L	97.3	39.0	22	51.3

(注)*1: 富山県公害センター(1990)富山県内主要河川の自然特性に関する研究(神通川上流部)研究報告。1990年年間平均値(4回調査)。

*2: 水質環境工学研究室による。2011年年間平均値(4回調査)。

表 4-1 富山県立大学奥川光治准教授による水質分析結果

分析方法

項目	方法
気温	デジタル温度計 SATO製 SK-250WP II-R
水温	TOA-DKK製EC・pHメータ(WM-32EP)
pH	TOA-DKK製EC・pHメータ(WM-32EP)
電気伝導率	TOA-DKK製EC・pHメータ(WM-32EP)
濁度	日本精密光学製積分球式濁度計(SEP-PT-205D)
溶性ケイ酸	モリブデン黄による吸光光度法(上水試験方法)
有機物(TOC)	NPOC法(アナリティクイエナ製 N/C 3100)
全窒素	ペルオキシニ硫酸カリウム分解-カドミウム・銅カラム還元法(BLTEC製オートアナライザー-SWAAT)
アンモニア態窒素	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
硝酸態窒素	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
無機態窒素	アンモニア態窒素+硝酸態窒素
有機態窒素	全窒素-無機態窒素
全リン	ペルオキシニ硫酸カリウム分解-モリブデン酸・アスコルビン酸法(BLTEC製オートアナライザー-SWAAT)
塩化物イオン	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
硫酸イオン	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
炭酸水素イオン	アルカリ度(上水試験方法)
ナトリウムイオン	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
カリウムイオン	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
マグネシウムイオン	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
カルシウムイオン	イオンクロマトグラフ法(DIONEX製ICS-1600)
硬度	マグネシウムイオン及びカルシウムイオンの濃度から換算

表 4-2 富山県立大学奥川光治准教授による水質分析の方法

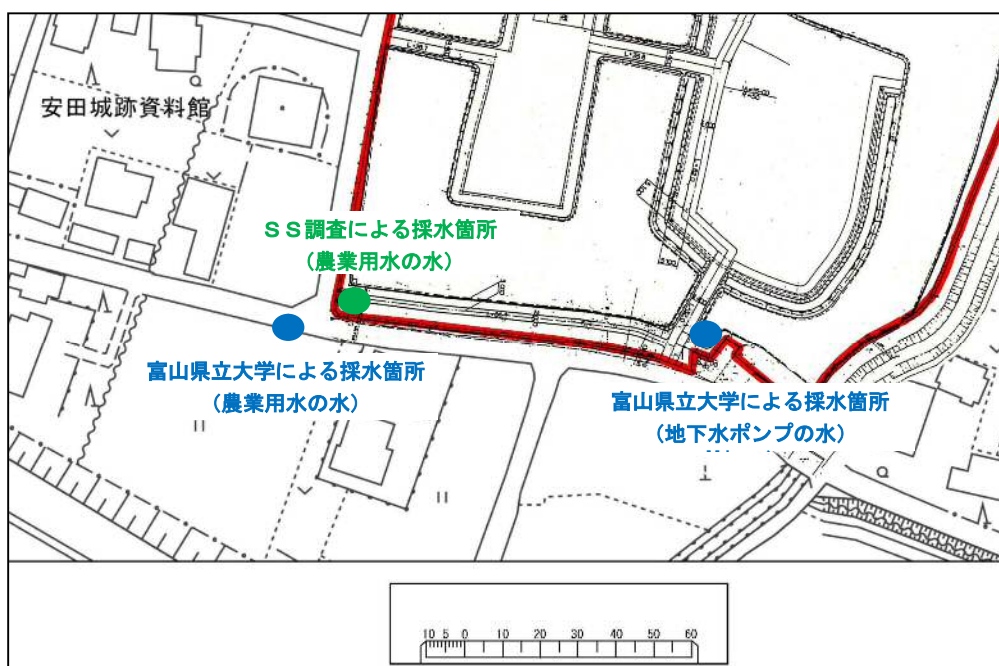


図 4-8 水質調査の採水箇所

②業務委託による農業用水の浮遊物質量（SS）調査

農業用水に含まれる泥の微粒子の量を把握し、今後の底泥の堆積について予測するため、給水口付近の用水の水の浮遊物質量（SS）調査を実施した。この調査は、粒径 1 μm（マイクロメートル）以上の微粒子の濃度（mg/L）を測定するものである。調査の結果、1L当たりの浮遊物質量は 1 mg/L と、用水の水に含まれる微粒子は非常に少ないことが分かった。この濃度が仮に年間を通して継続されるのであれば、農業用水が堀の底泥の堆積に与える影響は微々たるものである。

しかし、これはあくまでも冬季の数値であり、代掻き期・田植え期・大雨等の際には浮遊物質量が高濃度となることが予測される。

今後、年間を通じた浮遊物質量調査と用水の流量調査を実施して、今後の底泥堆積の試算を行うことが望ましい。

【浮遊物質量調査業務委託の結果（計量証明書による）】

検体採取月日 平成 31 年 1 月 11 日

検体数 1

計量	計量の結果	定量下限	計量方法
SS (mg/l)	1	1	環告 第 59 号 付表 9

4. 土塁の復元についての問題点

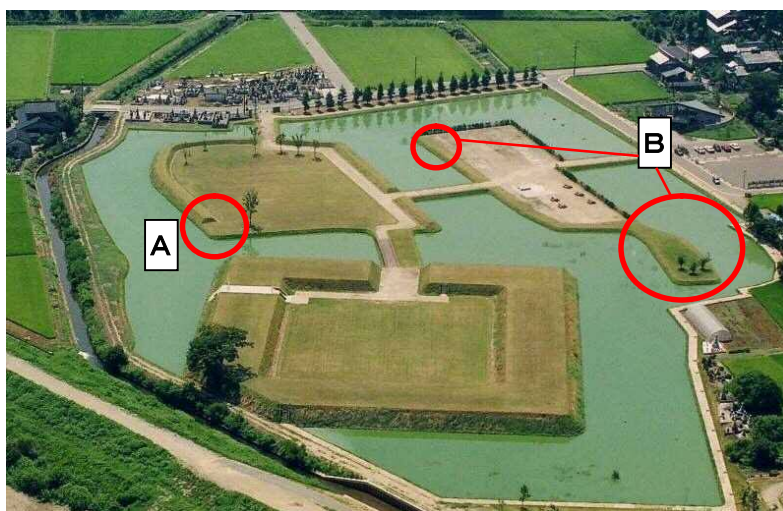
土塁は、発掘調査結果や「越中安田古城之図」をもとに復元されたが、現状では、来場者に誤った歴史認識を与える可能性がある箇所が存在する。

（1）二の丸東側土塁（盛土による復元）

- ・北端部の土塁が復元されておらず、城の構造上も不自然で、古絵図とも一致しない。

（2）右郭土塁（植栽による復元）

- ・右郭の土塁は、古絵図に描かれた土塁を再現し、発掘調査で確認された土塁と差別化を図りながら、来場者に城の構造を伝えるために植栽されたものである。
- ・現在の植栽範囲は、古絵図に描かれた土塁の範囲と一致せず、復元が不足している。
- ・現在は、枯死により歯抜け状態となり、土塁の再現という目的を果たしていない。



A 二の丸土塁の復元不足箇所
(盛土)

B 右郭土塁の復元不足箇所
(植栽)

写真 4-16 土塁の復元不足箇所の位置

5. 堀の水生植物の現状

平成 10 年度頃に広場の景観美化のために植えたスイレンのほか、種が流れ込んで自然繁殖したヨシや園芸・観賞用の品種が人為的に投入されたと考えられるヒシ・アサザなどが確認され、それらが過剰に繁茂して様々な問題が生じている。



写真 4-17 ヒシ



写真 4-18 アサザ

特にヨシは、広範囲にわたり水面を覆っており（図 9-4-1）、高さは曲輪・土塁の高さをはるかに超える約 3m まで達しているため、曲輪の形状を理解する上で妨げになっている。また根茎が、地盤改良されていない曲輪の法面（整備面）まで及んでおり、保存上も問題がある。

また現在は、植栽している水生植物以外の植物（ヨシ、外来種等）の侵入対策がとられていない状況である。



写真 4-19 ヨシの繁茂状況（ヨシが生えている部分が堀で、手前が右郭）

6. 土塁展示施設の現状

施設は半地下式の構造となっており、内部には土塁の土層剥ぎ取り標本と解説用の陶板製タイルを壁面展示している。施設に設置した階段から、土塁上に上がることができる。

躯体の防水機能が低下し、水の影響により施設内の天井の塗装が剥離しているほか、屋上の目地が劣化して伸縮目地部分に芝生が根付き、浸水の一因となっている。

現在、屋上をブルーシートで覆い、防水のための応急処置を行っている。

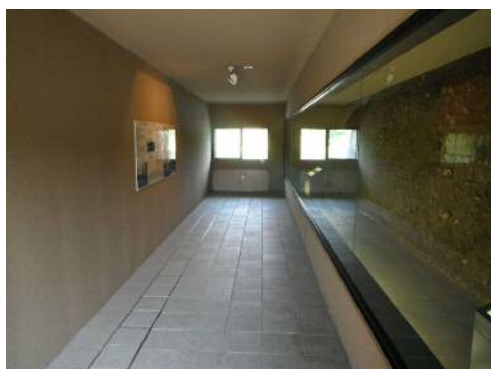


写真 4-20 土塁展示施設の内部



写真 4-21 施設内の塗装の剥離



写真 4-22 屋上の状況



写真 4-23 屋上の応急処理の状況

7. 本丸土塁の木製階段の現状

本丸の階段は3箇所を設置されており、土塁展示施設の階段を除く2箇所が木製である。段数は、北側階段14段、南側階段9段である。

階段で土塁に上がる体験は、高さや傾斜角度（45度）から土塁の防御性の高さを体感したり、土塁上から敵兵を攻撃して本丸を守る等、土塁の役割を知ってもらうために役立っている。

土塁の傾斜角度が急であることから、法面から土壌が流出して階段面が崩れ、手摺のコンクリート基礎が露出している。また、木材は、富山県特有の多雨多湿な気象条件により腐朽し、修繕を繰り返している。直近では、南側階段は平成25年度、北側階段は平成26年度に修繕したが、平成30年10月現在、既に著しい劣化が認められる。



写真4-24 木製階段の位置



写真4-25 木製階段の劣化状況

8. 野外模型の現状

野外模型は、城の立体模型（縮尺1/110）や「越中安田古城之図」等の説明のほか、関連の城との位置関係が現地で体感的に学べる大型地図（縮尺1/1700）を野外に展示したものである。面積は81㎡（9×9m）、材質は磁器質タイルである。

模型は、城の概要がコンパクトにまとめられており、城の立体模型は子供にも理解しやすいことから、利用頻度が高いものである。

平成3年度工事による設置から27年が経過し、タイルには破損（ひび割れ、欠け）や情報の修正・追加が望ましい箇所が多くみられる（表4-3、図4-9）。また、現在のタイルは釉薬の砂粒子の含有量（滑り止め加工）が少なく、積雪時に歩行すると滑る。

既存タイルの数量は次のとおりである。

磁器平板タイル（地図）	300角	72.2㎡
入隅役物タイル		11.5㎡
磁器立体模型	300角	8.2㎡
縁石ボーダータイル	50W×40H	36.2㎡

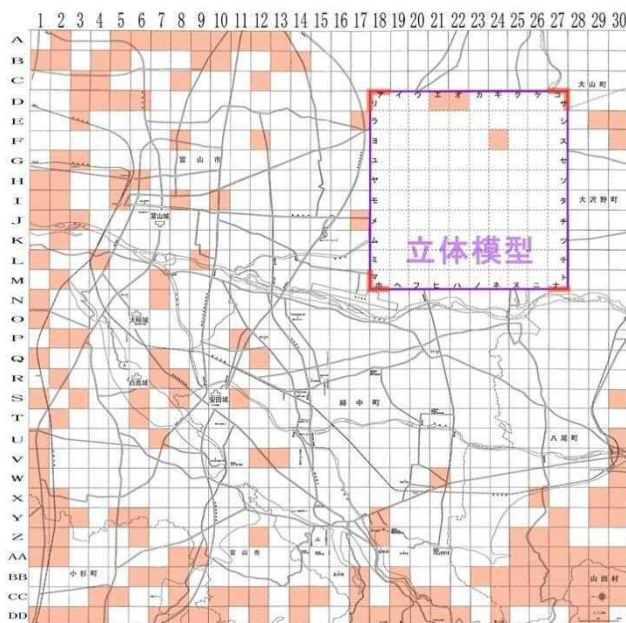


写真4-26 野外模型

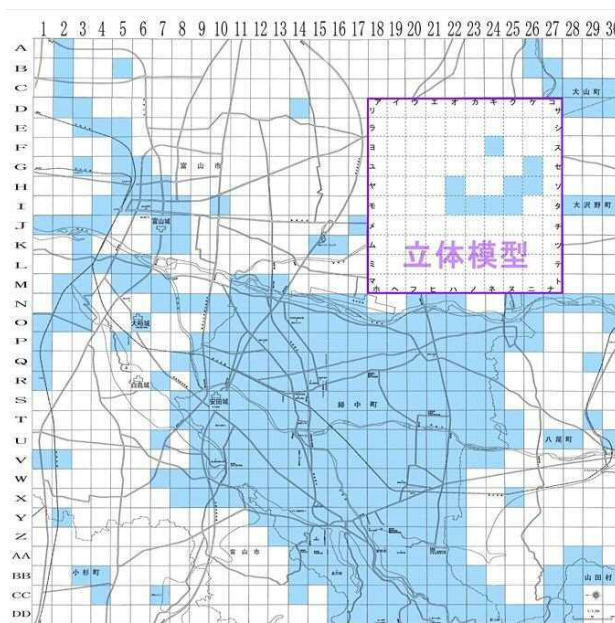
	地図 (平板タイル) 800 枚中	立体模型 140 枚中	縁石ボーダータイル 120 枚中	いりすみやくもの 入隅役物タイル 40 枚中	計 1100 枚中
A. 破損 (ひび割れ、大きめの欠け)	167 枚	3 枚		7 枚	177 枚
B. 情報修正・追加が望ましいタイル	344 枚	9 枚			353 枚
C. 浮いたタイル			120 枚		120 枚
D. 破損 (小さめの欠け)	71 枚				71 枚

表 4-3 野外模型のタイルの現状

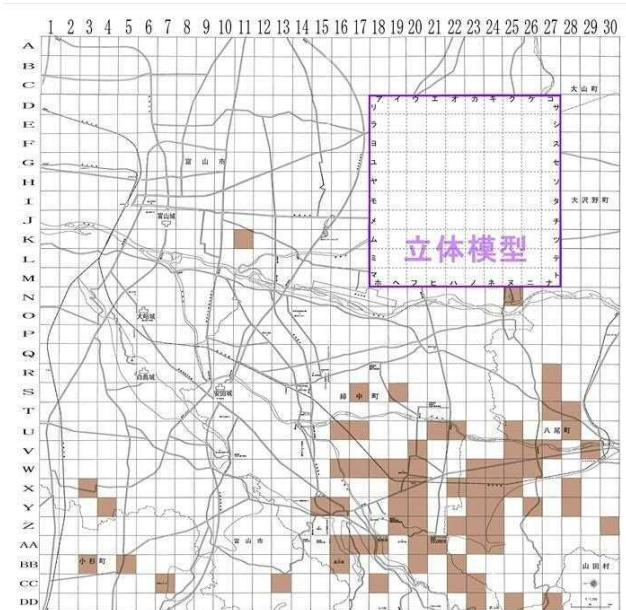
※重複あり。A～Cは交換、Dは欠けた部分の色修正が望ましいタイル



A. 破損箇所 (ひび割れ、大きめの欠け)



B. 情報の修正・追加が望ましいタイル



D. 破損 (小さめの欠け)

図 4-9 野外模型のタイルの現状

※重複あり。A・Bは交換、Dは欠けた部分の色修正が望ましいタイル

9. 園路の現状

当初整備時の舗装は、骨材（山砂）1 m³につき固化材（天然土壌安定材シュタイン）180 kgを混合後、路盤（碎石）上に敷均し、転圧して仕上げた土系舗装である。

現在は経年劣化により、摩耗・泥濘化、剥離・亀裂が起きて凹凸が目立つ状況であり、富山県特有の湿潤な気候条件によりコケが発生して滑りやすくなっている箇所もある。これにより、来場者の歩行に支障をきたしている。

また、園路には、芝生等の緑地管理や行事（安田城月見の宴）開催の際に管理車両が乗り入れているが、現在の舗装構造は歩行者専用道の舗装構成（舗装材10 cm・路盤10 cm）であり、4 t以上の管理車両の乗り入れには非対応である。

平成19年度には、使用頻度の多い散策路の一部を、樹脂と砂で表面コーティング処理（2 mm厚）したアスファルト舗装（4 cm厚）で修繕した。修繕後11年を経た現在、舗装面には摩耗・泥濘化やコケの発生がなく、当初整備時の土系舗装と比べると比較的良好な状態を保っているものの、舗装の一部には、端部の表面コーティングが剥がれて下地の黒舗装が露出した箇所や、浅いひび割れが生じた箇所がある。

10. 動物の現状

堀には、コイ、ブラックバス、フナ、アメリカザリガニ等が生息しており、外来生物については周辺環境への影響が懸念される。また、カモやアオサギ等の鳥の飛来も観察される。

本丸（土塁・平場）、二の丸（平場）、右郭（平場）にはアズマモグラが棲み着き、モグラ塚を作っている。地表面に確認される穴は地下で繋がっており、遺構や整備面への影響が懸念される。平成30年11月13日、富山大学理学部生物圏環境科学科の協力により、本丸・二の丸のモグラ塚にワナ16ヶ所を設置して捕獲を試みた。捕獲はできなかったが、同学科の横畑泰志教授から次の見解を得た。

「モグラ塚の分布状況から、現在城跡に生息するモグラは多くとも3匹程度である。水堀にはモグラの侵入を遮断する効果はあるが、モグラは多少泳げるため、堀に島状の陸地（底泥露出箇所）があると城内に入り込む可能性が高まる。捕獲しても、外部と陸地で繋がっている箇所（土橋、本丸北東端）からまた侵入するため完全な排除は難しいが、侵入口に地下に1m程度の深さで壁を設置すれば防げる可能性がある。」

史跡の保存上、地下に壁を設置することはできないが、横



写真 4-27 園路の現状



写真 4-28 土系舗装に発生したコケ



写真 4-29 H19 アスファルト舗装のひび割れ



写真 4-30 二の丸のモグラ塚



写真 4-31 モグラ捕獲用のワナ
筒にモグラが入ると、棒が下がって蓋が閉まる仕組み

畑教授の見解を参考にすると、侵入口に壁に代わる対策を施すことができれば、一定の効果が望める可能性がある。

箇所	No.	現状
堀	①	護岸は地盤改良されていないため水が浸透しやすく、松杭の劣化等により護岸が浸食を受けて漏水・陥没・土砂崩落が頻発し、応急処置を繰り返している。
	②	過剰に繁茂したスイレンが堀全体を埋め尽くして、底泥の堆積の主原因となっている。はびこった根茎が底泥の露出を助長し、景観を悪化させているほか、水堀で防御された往時の城の姿を伝える上で妨げとなっている。
	③	底泥が平均約 20cm の厚さで厚く堆積し、渇水期には広範囲で露出する。悪臭の苦情があるほか、水を滞留させて藻類（アオコ）の発生の原因となっている。
	④	ヨシが広範囲にわたり繁茂し、根茎が曲輪の法面（整備面）を損壊しているほか、高さが曲輪・土塁をはるかに超える 3m に達するため、曲輪の形状を理解する上での妨げとなっている。
	—	ブラックバス、コイなどの生物が生息している。外来種については、周辺環境への影響が懸念される。
土塁展示施設	⑤	半地下式の躯体の防水機能が低下し、水の影響で天井の塗装が剥離している。防水のため、屋上をブルーシートで覆う応急処置を行っている。
土塁	⑥	本丸土塁に上るための階段 2 箇所は、木材の腐朽や、階段面の崩落、手摺のコンクリート基礎の露出により、修繕を繰り返しており、安全性に問題がある。
	⑦	土塁は、土砂崩落の危険性がないか、日常的・定期的な点検を継続していく必要がある。
土塁、土橋	⑧	二の丸・右郭の土塁の復元が不足している。二の丸南側の土橋は、廃城後の農道（緊急避難経路として維持）であるが現地に説明がない。そのため、来場者に誤った歴史認識を与える可能性がある。
野外模型	⑨	設置から 27 年が経過し、陶板の破損や情報の修正・追加が望ましい箇所が多くみられる。
園路	⑩	当初整備時の土系舗装は、自然の風合いを重視した土系舗装であり、経年劣化や凍害により凸凹が目立つほか、コケが発生して滑りやすくなっており、来場者が転倒する危険性がある。
サイン	—	現在サインは広場入口の史跡説明看板 1 基のみであり、広場で得られる情報が少ない。現状が当時と異なる箇所や土塁の植栽表現について説明が現地になく、来場者に誤解を与えている。法律で義務付けられている説明板も未設置である。
休憩施設	—	城内には日差しや雨を除けながら座って休憩できる施設が全くなく、特に夏季の散策が厳しい状況である。
モグラ被害	—	本丸（土塁・平場）・二の丸（平場）に、モグラが棲み着いて地下にモグラ塚を作っており、史跡保護や施設管理の障害となっている。
資料館	⑪	資料館周囲の木柵が、腐朽や虫害により強度が低下し、ぐらついており（196 本中 53 本）、安全性に問題がある。
	⑫	最新の研究成果や関連する城の紹介など常設展示の拡充が望まれるが、資料館が狭く、展示スペースの拡張が難しい。ガイダンス室では、史跡解説映像を家庭用プロジェクターで投射しているが、映像が見えにくく、音声も聴き取りづらい。映像再生は管理人に依頼せねばならず、気軽さに欠ける。ガイダンス室では企画展示や講座等も開催しており、スペースの有効利用が求められる。

表 4-4 検討を要するおもな箇所ごとの現状 ※丸数字は図 4-10、写真 4-32 と共通

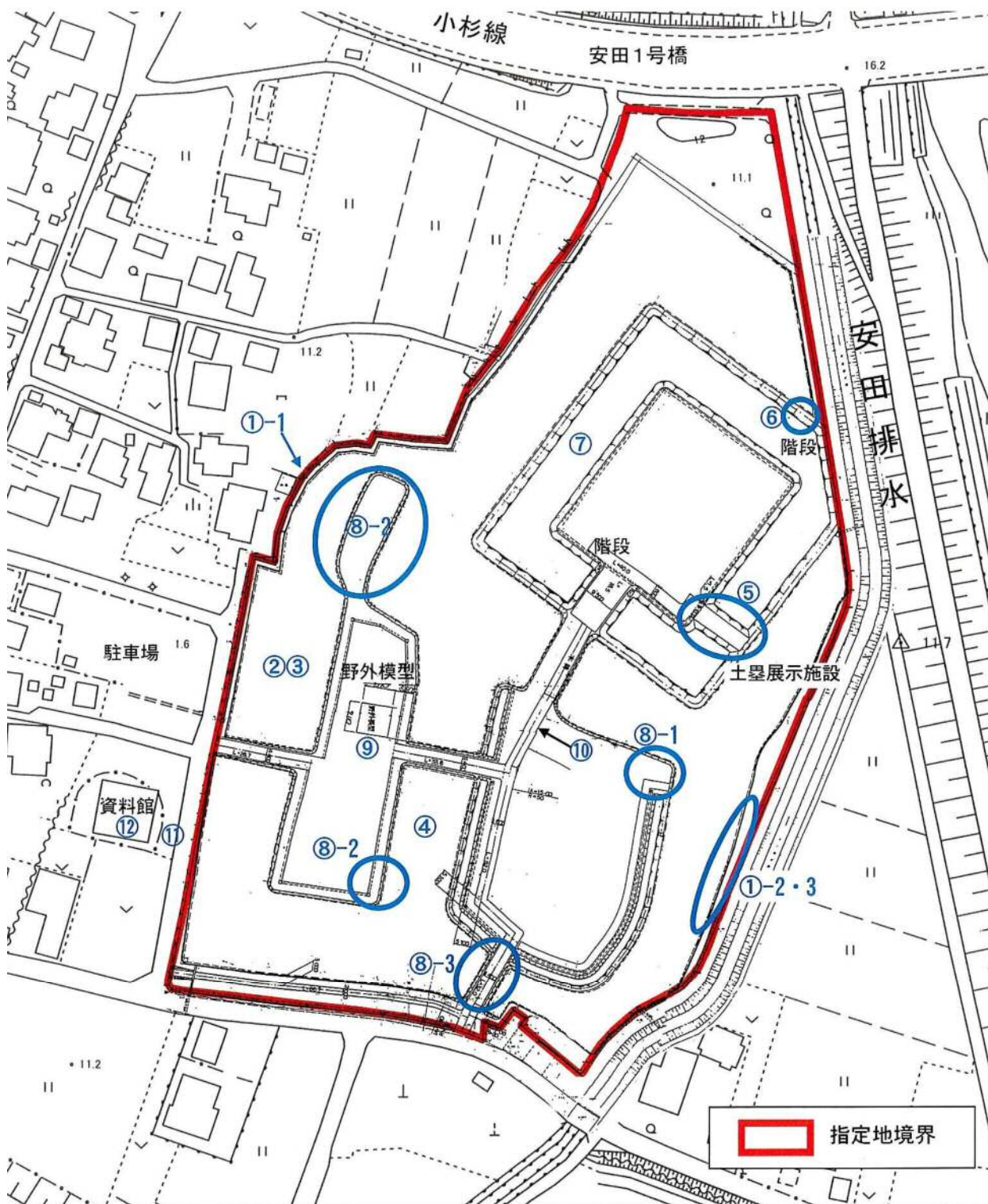


図 4-10 検討を要するおもな箇所の位置 ※丸数字は表 4-4、写真 4-32 と共通



①-1 堀 護岸の浸食と松杭の劣化状況



①-2 堀 漏水箇所応急処置状況



①-3 堀 護岸陥没穴応急処置状況



②堀 睡蓮の過剰繁茂の状況



③堀 底泥の露出状況（渇水期）



④堀 ヨシの繁茂状況（ヨシが生えている部分が堀）



⑤-1 土塁展示施設 屋上防水応急処置状況



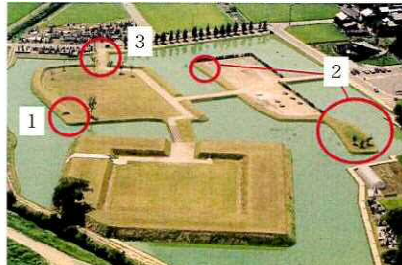
⑤-2 土塁展示施設 天井塗装剥離状況



⑥本丸土塁階段 土砂流出状況



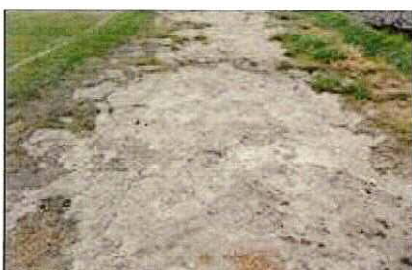
⑦本丸土塁の状況（H21 段階）



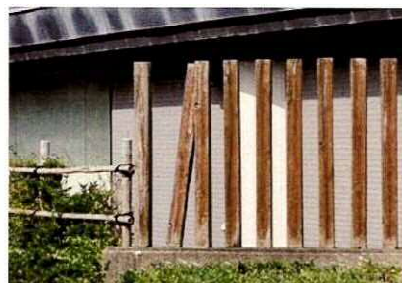
⑧復元方法等に検討が必要な箇所



⑨野外模型の亀裂状況



⑩園路の劣化状況



⑪資料館周囲の木柵の劣化状況



⑫資料館の使用状況

写真 4-32 検討を要するおもな箇所の写真 ※丸数字は表 4-4、図 4-10 と共通

第3項 保存・整備の課題

史跡の保存・整備の課題を次に示す。

1. 堀

- (1) 老朽化した護岸・堀底の改修の方法や、浚渫の方法について検討が必要である。
- (2) ヨシは、史跡を学習する上での障害になり、史跡の保存上も問題があるため、完全に除去する必要がある。また、今後も植栽している水生植物以外の植物（ヨシや外来種）が侵入してくる可能性が高いため、対策をとる必要がある。
- (3) 現在の給水方法（農業用水のみによる給水）では、稲刈時期の水位低下や泥の微粒子の流入（＝底泥の堆積）が不可避であることを考慮して、今後の給水方法や対策を検討する必要がある。
- (4) 農業用水は、季節によって流量や含まれる泥の微粒子の量が変わるため、年間を通じた浮遊物質量調査と用水の流量調査を実施して、底泥堆積の試算を行う必要がある。
- (5) 農業用水の使用に関しては、地元の自治会や水利担当、土地改良区との連絡調整や情報共有に一層努める必要がある。



写真 4-33 ヨシの根茎が右郭の法面まで伸びている状況
(青い管は地下水ポンプの給水管)

2. 土塁

- (1) 二の丸・右郭の土塁の復元について、来場者に誤った歴史認識を与える可能性がある箇所については、その対策についての検討が必要である。
- (2) 土塁展示施設は改修し、躯体全体の防水機能の向上を図る必要がある。
- (3) 本丸土塁の木製階段は改修の必要がある。改修にあたっては、長寿命化対策に考慮し、使用資材・工法を耐久性、耐候性のあるものに変更する必要がある。

3. 野外模型

- (1) 野外模型は、改修の必要がある。利用頻度が高いことから、今後も使用を継続することが望ましいが、改修費用とのバランスから今後の取り扱いについて検討する必要がある。

4. 園路

- (1) 舗装は改修の必要がある。改修にあたっては使用資材・工法を耐久性、耐候性のあるものに変更することが望ましい。

5. 動物等

- (1) ブラックバス等の外来種は、堀改修時に駆除する必要がある。
- (2) モグラは、史跡保護や施設管理の障害となるため排除が望ましい。侵入口（土橋、本丸北東端）に、史跡に影響のない範囲で何らかの対策を検討することが望ましい。

第2節 活用の現状と課題

第1項 活用の現状

1. 来場者の現状

安田城跡は、史跡公園として整備された城跡であり、小規模ながら資料館も併設されていることから、市の観光名所となっている富山城とともに、富山の城に興味を持つ人々の多くが訪れる場所となっている。城の見学を目的とした来場者の多くは、県内の主要な城も合わせて見学されている場合が多い。来場者数は、昨今の城郭ブームもあり、右肩上がりに増加している。

こうした来場者増の背景には、スイレンの名所として定着したことも挙げられる。広場内の散策路は平坦なため、福祉施設から車椅子で花を観賞に来る来場者も多い。

整備当初、安田城跡資料館は映像設備による史跡説明及び安田城跡の出土品の常設展示という固定的な活用のみが行われており、あまり変化がない状態であったことから、開館3年目以降は来場者数の低迷が続いた。これを打開するため、平成18年度からは企画展示とその関連の展示解説会、平成24年度からは歴史講座（大人・子ども向け）を実施し、城郭研究家の協力により県内の主要な山城の縄張り図の配布等も行っている。来場者増の背景には、先述のスイレン以外にもこうした地道なソフト事業の展開によるリピーターの増もある。

平成5年5月13日の広場開場から平成31年2月末までの来場者数は251,748人である。

来場者の内訳は、大人が237,039人（94%）、子供が14,709人（6%）と子供がかなり少ない（表4-11）。個人・団体別の内訳は、団体（20人以上）が38,522人（15%）で、個人が223,565人（85%）と多くが個人客である（表4-12）。団体では、歴史同好会や地区長寿会、公民館行事、旅行会社の城めぐりツアー等が多くみられる一方で、学校の社会科見学での利用は直近の5年間で年間1～2校程度と低迷している。



表4-5 来場者数の推移
(開場～平成31年2月末現在)

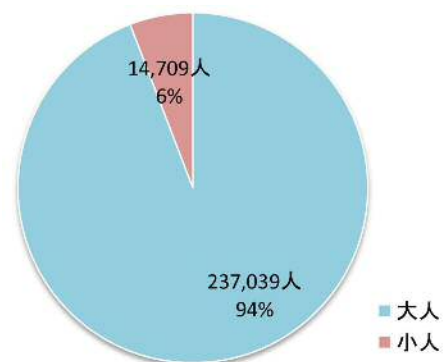


図4-11 大人・小人別の割合
(開場～平成31年2月末現在)

居住地別の内訳は、市内 121,330 人 (84%)、県内 15,767 人 (11%)、県外 7,014 人 (5%) である (表 4-13)。ただし、これは資料館の来館者名簿に記帳された人数であり、記帳されなかった場合は市内に区分しているため、実際には県外・県外的人数はこれより多い。(居住地別内訳は、団体客の居住地別の集計を開始した平成 22 年度以降のデータに基づく)

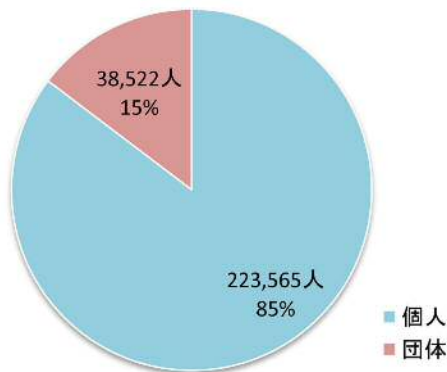


表 4-12 個人・団体別の割合
(開場～平成 31 年 2 月末現在)

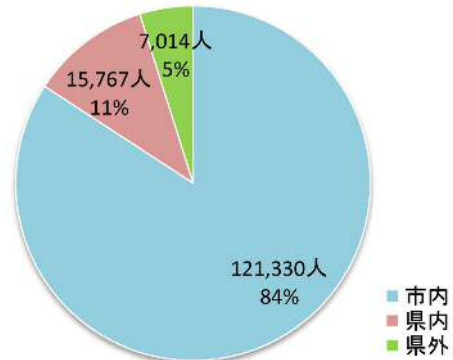


表 4-13 居住地別の割合
(平成 22 年度～平成 31 年 2 月末現在)

2. 水生植物の植栽に関する現状

堀には、平成 10 年頃から植栽したスイレンが広がり、その名所として長く周知されている。花が見頃となる 5・6 月には新聞やテレビ等の報道にも取り上げられ、通常月の 3～4 倍の集客があり、歴史学習だけでなく、自然と触れ合う憩いの場としてのニーズが高まっている。

その一方で、ここ数年は過剰に繁茂したスイレンやヨシが堀全体を埋め尽くすようになり(堀全体の約 62%)、スイレンは毎年根茎ごと間引きしているが追いつかない状況である。水面が見えない部分が広範囲におよぶため(図 9-4-1)、周囲を水堀で防御した本来の安田城の姿が理解しづらく、また、水生植物に起因する底泥が堆積し、はびこった根茎が底泥の露出をさらに助長するなどの問題が生じている。

年度	通常月 (5・6 月以外)	スイレンが見頃となる月 (5・6 月)
27	1,013 人/月	3,913 人/月
28	1,157 人/月	3,089 人/月
29	1,170 人/月	4,061 人/月

表 4-6 通常月とスイレンが見頃となる月の来場者数 (平均) の比較



写真 4-34 安田城跡のスイレン
(過剰繁茂する前の状態)



写真 4-35 スイレンの過剰繁茂状況

3. サインの設置状況と動線

現在、広場内に設置してあるサインは、広場入口の史跡の史跡全体説明看板(文字情報のみ)1基のみのため、広場で得られる情報が少ない状況となっている。史跡の見どころが分かりづらいため、見学の動線も明確でなく、入口から最も遠い本丸の土塁展示施設の存在に気がつかない来場者もいる。

唯一ある広場入口の看板についても、木材のため腐朽が著しい上、高さがあるために城跡を正面から眺めた際、往時の雰囲気をも崩す要素になっている。

文化財保護法第115条第1項の規定により設置が義務付けられている史跡の全体の概要(史跡名称、指定年月日、指定理由、説明事項、保存上注意すべき事項等)を示す「説明板」が未設置である点についても問題である。

また、以下に挙げる箇所については、現状が当時の城の状況と異なっているが、現地に説明がないため、来場者に誤った歴史認識を与える可能性がある。

- (1) 「越中安田古城之図」にも描かれている二の丸南側の土橋は、発掘調査の結果、廃城後の農道と判明している(現在は災害時の避難経路確保のため維持)。当時、当該地は堀・土塁で防御されていたはずであり、城への出入口は右郭の土橋のみだったと考えられる。
- (2) 本丸の堀・土塁は、東池田川排水路があるため北東隅が欠けた状態で復元されているが、本来は堀・土塁は全周していたはずである。
- (3) 右郭のイチイ・ベニカナメによる植栽は、古絵図に基づき土塁を表現したものであるが、来場者に整備の意図が伝わっていない。



写真 4-36 現在の史跡全体説明看板



写真 4-37 二の丸南側の土塁



写真 4-38 サインによる説明が必要な箇所

4. 休憩施設の設置状況

現在、広場には座って休憩できる日陰や休憩施設が一切なく、猛暑が続く夏場や梅雨時期の散策は厳しい状況である。

5. 安田城跡資料館の現状

(1) 安田城跡資料館の概要

安田城跡資料館は、史跡指定地の西側隣接地に所在する。安田城跡の価値を的確に伝達するためのガイダンス施設であり、安田城跡に関する展示のほか、ミニ企画展示や歴史講座等の普及事業を行っている。施設の利用案内への記載事項は、次のとおりである。

- ・所在地 富山県富山市婦中町安田 244-1
- ・開館時間 午前9時～午前5時（入館は午後4時30分まで）
- ・休館日 月曜日（祝日を除く）、祝日の翌日（ただし、翌日が土・日の場合は開館）、年末年始（12月28日～1月4日） ※臨時休館・開館あり
- ・入館料 無料

現在は、施設の老朽化が著しく、照明設備や給水管の漏水、外壁・タイルの浮き等の修繕を毎年行っている状況である。

(2) 常設展示の現状

常設展示については、現在は安田城主体の展示となっている。越中出陣をめぐる研究は近年進展をみせているが、展示にはこうした最新の研究成果が反映されておらず、また関連する城との関係性も理解しづらい状況となっている。しかし、展示室の面積が狭く（約12㎡）、ガイダンス室（約70㎡）は史跡解説映像の上映や企画展示、歴史講座等の行事の開催にも使用していることから、常設展示スペースの拡充は難しい。

ガイダンス室では史跡解説映像（14分間）が視聴できる。映像は当時の歴史背景や発掘調査の成果等をアニメーション等を交えて分かりやすく解説するものであり、非常に好評であるが、短時間の視聴を希望される人には向かず、映像コンテンツが1種類しかないので選べない。

(3) 映像設備の現状

安田城跡では、堀・土塁のみが復元されている。そのため、ガイダンス室で視聴する史跡解説映像は、戦国時代の安田城の様子を来場者に具体的にイメージしてもらうために、非常に重要な役割を果たすものである。

しかし、現在、映像設備は家庭用のプロジェクターを使用しており、スクリーンは故障した80インチマルチプロジェクションの表面に生地を貼り付けたものである。現在の機器の輝度では画面が見づらく（投射位置が玄関のガラス戸横にあり、外光を遮断できない）、音量も小さく聞きづらい。

さらには映像再生の際は、管理人に機器操作を依頼せねばならず、気軽に視聴できる環境とは決していえない状況である。

また、資料館内で企画展示や歴史講座等の普及活動を実施しているが、行事を開催する部屋がガイダンス（約70㎡）しかなく、床にプロジェクターがあると、空間の有効利用ができない点も問題がある。



写真 4-39 プロジェクターの設置状況



写真 4-40 行事開催時のガイダンス室
（部屋の中央で子供歴史講座、壁際で企画展示を開催）

(4) 資料館周囲の木柵の現状 (図 8-15、図 8-16)

この木柵は、松材(100 mm角、長さ 1450 mm程度)で、下部のRC壁(高さ 800 mm)の根入部分(100 mm四方、深さ 250 mm、10 cm間隔)にボルトで固定されている。木柵の延長は、次の通りである。

- ・アール施工部分：西南壁 13,780 mm、北東壁 4,800 mm、東北壁 4,800 mm、東南壁 16,916 mm
- ・直線施工部分：北側壁 2,000~2,400 mm、東側壁 2,000~2,400 mm

現在、資料館周囲の木柵は、富山県特有の多雨多湿な気候条件による腐朽や虫害により強度が低下し、ぐらついている状況である(196本中53本)。平成29年度には台風被害で倒壊した4本を、当初整備と同様に木材で修繕した。その後も傾いた木柵が3本確認されたため、事故防止のため撤去のみを行った。



写真 4-41 資料館周囲の木柵の現状

6. その他のソフト事業の展開状況

(1) 安田城跡に関する情報の発信、提供

外に向けた情報の発信については、安田城跡歴史の広場のリーフレットやちらしを、市内の社会教育施設等に配置しているほか、富山市埋蔵文化財センターのホームページに安田城跡のページを設けている。行事開催の際は、ちらし配布のほか、このホームページや市の広報等に情報を掲載している。

史跡内での情報の提供については、設置された看板が1基のみであり、散策マップも無いため、史跡の見どころや見学の動線が分かりづらい状況である。

(2) 行事

安田城跡歴史の広場では、地元の朝日地区が「安田城月見の宴」（安田城跡月見の宴実行委員会主催）を毎年8月に開催しており、平成30年度に26回を数えた。この行事では、朝日小学校児童による少年少女武者行列や剣舞、民謡などが行われて賑っている。

市主催事業では、これまでに「アートギャラリーin 婦中」（平成7～16年度）、「安田城ラジコンスカイフェスティバル」（平成8年度）、「古代体験！まるかじりッ」（平成13年度）、「元気キッズの考古学バスツアー」（平成16年度）、「お城をもっと楽しもう！安田城の縄張り図作製体験」（平成24年度）、「お城をもっと楽しもう！ペーパークラフト作製体験（富山城櫓御門）」（平成24～27年度）、「安田城跡歴史の広場20周年記念2013朝日ふれあいウォーキング―戦国の世・佐々成政攻めの城をめぐる―」（平成25年度）、「佐伯哲也氏縄張り図展」（平成25年度）、「安田城跡夏休み子ども歴史講座」（平成27年度～）、資料館内では、市内の遺跡をテーマとしたミニ企画展や発掘速報展とその関連の展示解説会（平成18年度～）、歴史講座（平成24年度～）等を実施している。

(3) 学校教育との連携

学校教育との連携事業としては、平成27年度から実施している「安田城跡夏休み子ども歴史講座」がある。これは小学生4～6年生を対象とした講座で、平成30年度に4回を数えた。内容は、史跡安田城跡の歴史について、出土品や復元された城跡でのフィールドワークを通して学習し、最後に各自レポートにまとめて理解を深めるものである。

この講座では、毎回市内の小学校教員3名と教員OB3名に講師をお願いしている。講師に小学校教員等を迎える理由は、児童への指導の技術があり、児童にとって身近で親しみやすい存在であるためである。講師の選出は、市学校教育課と協議の上、富山県小学校教育研究会富山ブロック社会科部会に相談して決定し、各教員の所属校に依頼している。

一方で、学校の社会科見学等による利用は、直近5年間で年間1～2校と低迷している。安田城跡は堀と土塁のみの復元であるため理解しづらく、また学習を支援する子ども向けの教材が無いため、学校教育で利用しづらい状況であることもその一因であると思われる。



写真 4-42 安田城月見の宴の様子



写真 4-43 ミニ企画展の様子



写真 4-44 子ども歴史講座の様子



写真 4-45 子ども歴史講座の様子

第2項 活用の課題

史跡の活用についての課題を次に示す。

1. 水生植物の植栽に関する課題

- (1) 本広場は、史跡を保護・公開し、その歴史的な価値を理解してもらうための施設であるが、一面ではスイレンの名所としても知られており、花を觀賞しながら歴史に親しむことができる憩いの空間として、利用者ニーズが高い。
そのため、再整備においても、季節の風物詩として話題となる花を堀に植栽することで、人々が広場に訪れ、史跡に興味・関心をもつ一つのきっかけとするとともに、リピーターの増加を図ることが望ましい。
- (2) 再整備で水生植物の植栽を行うには、水生植物の植栽範囲・種類等の再検討、適切な維持管理の検討とともに、学校教育・社会教育との連携も視野に入れた教育的な活用方法の検討等が必要である。また、水生植物を目的として訪れた人々に、史跡の本質的な価値を伝える機会を効果的に提供することも重要である。

2. サインの設置と動線に関する課題

- (1) サインを増設して史跡に関する解説を充実することにより、史跡の本質的な価値を的確に伝達する必要がある。
- (2) 文化財保護法第115条第1項の規定により設置が義務付けられている史跡の全体の概要（史跡名称、指定年月日、指定理由、説明事項、保存上注意すべき事項等）を示す「説明板」を設置する必要がある。
- (3) 現在広場入口に設置されている史跡説明看板は、老朽化しており、往時の雰囲気崩す要素ともなっているため、設置場所を移動して更新する必要がある。
- (4) 詳細な情報を希望する来場者の要望に応えるため、他の媒体（携帯情報端末等）を利用して情報を補完することが望ましい。
- (5) サインの増設により見学の動線を明確にするとともに、広場の散策マップを作成・配布して、史跡の見どころを見逃すことなく散策できるように工夫する必要がある。

3. 施設利用の安全性・快適性に関する課題

- (1) 史跡の本質的な価値に影響を及ぼさないことを前提に、来場者が安全で快適に利用できる環境づくり（歩行に支障をきたしている園路の改善、休憩施設の設置、老朽化した土塁展示室の改修、陥没等の原因となっている堀の漏水の解消、資料館周囲の木柵の改修等）を推進する必要がある。

4. 資料館の活用に関する課題

- (1) 安田城跡資料館は小規模ながら、市の観光名所となっている富山城とともに富山の城に興味をもつ人々の多くが訪れる資料館であることから、越中の中世城館の学習拠点として人々の興味・関心に応えることが望まれる。
- (2) 常設展示や映像設備は、最新の研究成果を反映した秀吉の越中出陣に関する解説や、当時安田城と密接に関連した城（白鳥城・大峪城・富山城等）の紹介などを通して、安田

城を戦国時代末期の大きな流れの中で理解できるように改善する必要がある。

- (3) 資料館は極めて小規模であり、増築等の大規模改修も困難であるため、現在の限られたスペースの中で上記を実現する必要がある。
- (4) 映像設備は、来館者がいつでも気軽に視聴でき、学習しやすい画像・音声を提供できるよう改修が必要である。また、機器がガイダンス室での行事開催時に邪魔にならないよう、設置方法を検討する必要がある。
- (5) 資料館周囲の木柵は、改修の必要がある。来館者に中世城郭の雰囲気を感じてもらい意味合いで設置され、現在もその役割を果たしていることから、今後も木柱が立ち並ぶ資料館の外観を維持することが望ましい。改修にあたっては、長寿命化対策に考慮し、使用資材・工法を耐久性、耐候性があり、強度が確保できるものに変更する必要がある。

5. ソフト事業の展開に関する課題

(1) 安田城跡に関する情報の提供

- ①富山市埋蔵文化財センターホームページにおいて、安田城跡の調査研究・再整備・行事等に関する最新の情報等の充実や発信に努める必要がある。また、再整備に伴い、史跡に設置する看板のQRコードとリンクさせるなどの工夫が必要である。
- ②サインや野外模型、土塁展示施設等の位置を記した散策マップを作成・配布するなど、安田城跡の見どころを見逃すことなく散策できるような工夫が必要である。

(2) 行事に関する課題

- ①安田城と関係の深い城（白鳥城・大峪城・富山城等）をはじめとした、近隣の地域資源との連携による地域一体となった取組を推進する必要がある。それにより、地域像、歴史像の実態の理解が深まり、地域資源としての価値を一層高めることができる。
- ②安田城跡での再整備に伴う工事等を実施する際には、現地説明会を開催し、通常では見られない現場見学の機会を設ける必要がある。

(3) 学校教育・社会教育との連携

- ①安田城跡を学校教育・社会教育の場としてもっと活用しやすくなるよう工夫し、関係機関に働きかけていく必要がある。
- ②学校教育で史跡を活用しやすくなるため、教材となる子供向けの分かりやすい小冊子やパンフレットの作成や、史跡を活用した教育プログラムの開発が必要である。それらを効果的なものにするためには、学校等の教育関係者と協働で行うことが望ましい。

第3節 運営・体制の現状と課題

第1項 運営・体制の現状

1. 史跡安田城跡の保存・活用・整備に関する事項は、「富山市婦中安田城跡歴史の広場条例」「富山市婦中安田城跡歴史の広場条例施工規則」に基づき、富山市教育委員会埋蔵文化財センターが行っている。
2. 安田城跡資料館の運営体制は、次のとおりである。
 - (1) 資料館には管理人1名が常駐（常勤嘱託もしくは非常勤臨時職員）し、業務の内容や留意事項等を記載した「富山市婦中安田城跡歴史の広場 管理人業務マニュアル」に基づき、映像設備の操作や史跡のガイド等の来場者への対応や、広場を含めた施設の日常点検や維持管理を行っている。なお、来場者に対するガイド組織はない。
 - (2) 資料館の展示や講座などの普及事業は、市埋蔵文化財センター学芸員が担当している。
 - (3) 資料館の清掃や広場の緑地管理等は、業務委託で実施している。
 - (4) 点検は、管理人による日常点検のほか、市埋蔵文化財センターが月1回定期点検を行い、安全点検表（チェックリスト）を記載している。また、建物及び建築設備の定期点検については、市営繕課が年1回実施している。
 - (5) 危機管理については、「富山市婦中安田城跡歴史の広場危機管理基本指針」「富山市婦中安田城跡歴史の広場危機管理マニュアル」に従って対応する。

第2項 運営・体制の課題

1. 史跡安田城跡の各種事業の実施にあたっては、市民、地元自治会、教育機関（学校教育・社会教育）、関係機関、文化財や城郭の専門家など、多様な関係者が連携し、様々な取組を推進していくための体制の構築が必要である。
2. 今後の史跡の再整備事業、再整備後の維持管理、利活用（ソフト事業の展開）等、各種事業に対応し得る財源確保が必要である。